

音楽教育は何を教えるのか

日本学術振興会 理事長

木田 宏



学校教育の歴史の中で、音楽ほど、素晴らしい発達を遂げたものはあるまい。専門家であれば、理科・社会科学等の教科においても、同じような発展を指摘できるかもしれない。しかし、音楽教育の発達には、わが身の体験に徴して驚かされるのである。

昭和の初め、文部省唱歌の数々を小学校の教室で教わった。「村の鍛冶屋」「鯉のぼり」等等、歌詞は忘れても、懐しいメロディーは今も目の端に上ってくる。しかし中学校では、何を教わったか覚えていない。オルガンの弾ける教師にも事欠いていたのであろう。人の好い数学の教師が、危しげな歌声で拍子をとりながら、合唱をさせた教室の風景が、懐しく思い出されるだけである。

旧制の高校生となつては、寮歌や応援歌を

唱い、軍隊に入つては軍歌を覚えた。社会に出て、学校では全く縁のなかつた民謡や流行歌を人の後に付いて唱つたが、楽器は何一つ弾けることなく終わっている。

こうした体験と比較してみると、戦後の学校は、素晴らしい音楽教育を行つてきたと思われるのである。運動会や学芸会に繰りひろげられる鼓笛隊やブラスバンド、NHKコンクール等で競う合唱や合奏の素晴らしい。はては大学のグリークラブ、オーケストラ等の水準の高さ。これらはみな、学校における音楽教育の発達に支えられたものに外なるまい。

戦後は、教科としての「唱歌」が「音楽」となり、「鑑賞」と「表現」の二領域に分かれて、指導内容も示されている。楽典の理解、歌唱・器楽・創作にわたる表現力の養成など、

幅広い音楽教育が行われてきた。それらの成果が実っていると云えるのであろう。喜ばしいことである。

ところで、こうした音楽教育の効果が上った結果、音楽教育の指導は、今日かえって難しくなったのではないであろうか。

人々の音楽に対する理解と関心が高まり、学校外における音楽教育は拡がっている。鈴木鎮一先生のバイオリン教育、ヤマハの音楽教室等、音楽の指導は学校外に拡がり、稽古に励む子どもたちの層は厚くなった。即興で素晴らしい曲を演奏する者も少なくない。少年楽士の演奏や創作で、音楽の専門家を驚かせた例さえも伝えられている。

また、音楽をめぐる社会環境の変化も著しい。テレビ、ラジオ、ステレオなど、色々なメディアの発達は、音楽を日常生活と離れ難いものとしてしまった。世界各地のメロデーやリズムが、居間にも勉強部屋にも漂い、散歩にも乗物にも付き纏ってくる。生活の音楽環境が一変してしまったのである。

ピアノを保有する家庭は全国平均で二割に上っている。教師の保有率より高いかも知れ

ない。となれば、教師の及ばない技能をもった生徒も、稀ではないであろう。

こうした社会環境の中で、クラスにいろいろな才能の子どもを抱え、教師はどのような音楽教育をしているのであろうか。音楽教育は何をどうするのであろうか。今の教師たちは、音程を外しても権威を失うことのなかった昔の教師を羨ましく思うことであろうと、同情したくなるのである。

しかし考えてみれば、こうした音楽教育への問いかけは、総ての教科について、ひろくは学校教育全体について、問われているのではないであろうか。学校教育は何を教えるところであるのか。どのようにすれば、学校教育はその責任を果たしたと言えるのであろうか。

学校教育に携わる者は、その素晴らしい成果によって著しい変貌を遂げた社会環境の実態を把握し、それが学校教育に齎す影響、また学校教育に求めてくる課題について、率直に対応し、応えるところがなければならぬ。

今次教育改革で教育界に必要なことは、この自らを見直してみる態度ではないであろうか。